

べし、たゞ其の標字は吐字に當る音即ち *tu* を寫せりとは考ふ可らず、思ふに必ず誤字なるべし。

⑤ 茲に擧げられたる九姓中、骨崙屋骨なる一部につきては、所傳明らかならざれども、他の八姓はみな鐵勒諸部中の一に數へらるゝものにして、阿布思の外は既に隋書鐵勒傳中に其の名を認むべく（隋書には廻紇を韋紇に、僕固を僕骨に、拔曳固を拔野古に、思結を斯結に、契苾を契弊に作り）、新唐書回鶻傳にもまた各々其の傳を載せたり（舊唐書には別々に傳を立てざれども、此等の名はその鐵勒傳中に見ゆ）、阿布思部につきては、貞觀二十一年太宗が鐵勒諸部に六府七州を置きし時、舊唐書廻紇傳によれば、「阿布思爲歸林州」と見ゆ、此の事は新唐書回鶻傳には「思結爲歸林州」と記せり、歸林が歸林の誤字なることは云ふ迄も無ければ、兩書の記事が共に正しきものならば、阿布思は即ち思結ならざる可らず、然れども新唐書回鶻傳には此の時「思結部爲盧山(府)」と記し、舊唐書廻紇傳にも同様に「思結爲盧山府」とせり、されば歸林州は舊唐書の記せるが如く、阿布思部に置かれたるものと見ざる可らず、然るに舊唐書鐵勒傳には「思結別部爲歸林州」との記事見え、新唐書地理志にも、歸林州の下に「以思結別部置」と註せり、これによりて考ふれば、新唐書回鶻傳に「思結爲歸林州」と記せるは、思結の下に別部の二字を脱したるものなること明らかなると共に、阿布思部なるものが思結の別部なりしこと疑無きが如し、尙之に關しては本論三、註釋(2)參照を要す。

二

唐代の史籍を涉獵するものは、屢々單に九姓と記さるゝ部族の名に遭遇すべし、歐洲の學者は概ね之を以て回鶻部を指せるものなりと見、Chavannes 氏の如きも、下に見るが如く、回鶻か拔野古かの何れかを指せるものなりと説きたれども、此の名は新唐書回鶻傳に、裴羅が藥羅葛以下の九姓の地を占むるに至れりと記せる時より以前に於ては勿論、其の以後の時代に於ても、此等の九姓より成りし回鶻部を指せるものには非ずして、全く別個の團體